

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520089

研究課題名(和文) ガンディーの国家観：ヒンドゥーとムスリムの融和を基軸として

研究課題名(英文) Gandhi's Vision of Nation: With his View of Hindu-Muslim Unity

## 研究代表者

石井 一也 (Ishii, Kazuya)

香川大学・法学部・教授

研究者番号：70294741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：イギリスによる分割統治のもとでインドのコミュニズムが激化してゆくなかで、ガンディーが、最大宗派ヒンドゥーと第二宗派ムスリムの融和をひたすら説き、両者に統一国家の樹立を悲願としながら奮闘した経緯を辿った。宗教的な違いを乗り越えて、互いの信仰を尊重しあうことを人々に期待したガンディーの国家観は、いわゆる「国民国家」や利己心にもとづく人間像を前提とした近代的国家観と大きく異なっていることが理解された。

研究成果の概要(英文)：This research was an attempt to analyze how Gandhi endeavored to establish the communal unity between Hindu and Muslim, the largest and second largest religious groups, in their pursuit of independence, under the British policy of "divide and rule". Gandhi expected Indian people to respect each other's faith beyond their religious difference. His vision of nation was therefore understood to be different from those of western counterparts Hobbes and Locke, and Rousseau, who contributed to shape the images of nation in modern era.

研究分野：人文学

キーワード：ガンディー ジンナー コミュニズム セキュラリズム インド パキスタン 分離独立 コンヴィ  
ヴィアリティ

### 1. 研究開始当初の背景

申請者は、1994 年以來、ガンディーの経済思想を自由主義経済学やマルクス主義などの近代主義、あるいは 1960 年代以降のポスト近代主義との対比において検討し、これを 21 世紀に重要性をもつ思想として分析してきた。平成 18-19 年度科学研究費補助金基盤研究(C)では、彼の経済思想の基盤となる宗教的観念を、また平成 20-22 年度同補助金基盤研究(C)では、彼のカースト観を分析した。後者の研究が、インド社会における階層的マイノリティにたいするガンディーの眼差しを探るものであったとすれば、ヒンドゥー＝ムスリムの融和を基軸とするその国家像を探る本研究は、宗教的マイノリティにたいする彼の眼差しを分析しようとするものである。

### 2. 研究の目的

こうしたガンディーの国家観を分析する目的は、つぎの諸点にある。第一に、その前提としてインド社会における両宗派の共存と葛藤の歴史を探ることである。第二に、ムスリム側には復古派デーオバンドや近代派アリーガル運動が、またヒンドゥーの側にも復古派アーリヤ・サマージや近代派ブラフマ・サマージなどがあった。これらはしばしば、ムスリムの親ヒンドゥー・反イギリス、反ヒンドゥー・親イギリス、またヒンドゥーの親ムスリム・反イギリス、反ムスリム・親イギリスなどの複合的他者意識を示していたので整理することである。第三に、そうした錯綜した他者意識のなかからコミュニズムが先鋭化してゆくプロセスを理解すること、第四に、ガンディーがそうしたプロセスに抵抗するために構成した論理をジンナーとの論争を含む彼の言説から析出することである。第五に、非暴力や同胞愛によって規定されるガンディーの国家観を西欧近代のいくつかの国家観を対比しながら、その意義を探ることである。

### 3. 研究の方法

上記の第一、第二の目的を達成するための文献は、長崎 [1989]; Sarkar [1983]; Merrium [1980]など、第三のそれを達成するための文献は、Allana [1967]; 狭間・長崎 [2009]; Philips [1949]; Moon [1961]; Tendulkar [1988-90]; Fischer [1995]; Jalal [1985]などであった。また第四の目的を達成するための文献は、Gandhi [1963]; Gandhi [1997]; *CMMG* などであった。さらに、第五の目的を達成するための文献は、さしあたり、松本・川出 [1997] である。研究の方法としては、これらの文献を解読し、ガンディーの国家観を分析、その意義を探ることである。

### 4. 研究成果

ガンディーは、植民地インドが、ヒンドゥー

とムスリムの融和を基軸として、ひとつの国家として大英帝国から独立することを悲願としていた。彼は、両宗派を含む複数の宗派が、かつて日常的に共存していたとの前提にたつて、ひたすら人々の同胞愛にもとづく社会の構築を目指したが、イギリスの分割統治政策の帰結ともいえるインドとパキスタンの分離独立を食い止めることはできなかった。パキスタン建国の父モハメッド・アリ・ジンナーとガンディーによる「独立」への姿勢の違いは、前者のコミュニズムと後者のセキュラリズムが激しく対立した植民地インド史の重要なモメントとして理解されてきたが、そこにガンディー独自の国家観を「近代」批判のひとつの表現として析出する余地がある。こうした考えのもとに、本研究において得られた知見はつぎのとおりである。

長崎暢子は、インドのヒンドゥーとムスリムが、イギリスによる直接統治以前の時期に「入り組んだ、重層的な関係を結んできた」ことの証拠として、ムガル朝の皇帝たちが、ヒンドゥーの臣民を慮って牛肉を食べなかったことや、1857 年のインド大反乱でヒンドゥーとムスリムが共闘したことなどを挙げている [長崎 1989: 103-04]。他方、スミット・サルカールは、ヒンドゥーとムスリムの局地的な争いが、過去何世紀にもわたって時折生じたものの、大規模な衝突はようやく 1885 年以降に本格化してゆくことを示している [Sarkar 1983: 59]。これにたいして、アレン・H. メリアムは、7 世紀のイスラームによるインド侵略以来ヒンドゥーのイスラーム教への改宗や、偶像を備えた寺院の破壊などの事実とともに、アクバルがヒンドゥーへの差別的税を廃止し、彼らを役人として登用したことや、ヒンドゥー教を含めた諸宗教を融合したディーネ・イラーヒ (神的信仰) をうち立てようとした事実を示している [Merrium 1980: 5-8]。

ヒンドゥーとムスリムは、実際、きわめて対照的な宗教的特徴をもちながら、為政者および民衆の双方のレベルにおいて、共存と葛藤の歴史を辿ってきた。ガンディーは、たとえば 1925 年に「ヒンドゥーとムスリムは、イギリス支配以前に互いに争っていたことは、まったく証明できない」と述べた [Gandhi 1963: 6]。だが、こうした発言は、やや極端で、ムスリムによる侵略とそれにたいするヒンドゥーの反発の歴史をいささか無視した

議論であったかもしれない。だが、それでもやはり、植民地インドのコミュニズムが、イギリス支配によって 19 世紀後半以降に助長された面はなお事実として残るだろう。

長崎によると、デーオバンド派やファライズィー運動などによる復古主義は、ムスリムを純化し、活性化しようとする運動で、イギリス資本主義に市場を奪われた手工業者や農民の支持を強く受けた反イギリス的性格をもつものであったという。これにたいして、近代派アリーガル運動は、イギリスの支持をとりつけてムスリムの近代的改革を押し進めようとするもので、その親イギリス的態度は、対イギリス独立運動を推進する国民会議派にとっては抑止的性格をもつものであった。他方、ヒンドゥー側のアーリヤ・サマージは、シヴァージを祝う運動や牛保護運動においてときに反ムスリム的性格をもち、19 世紀の後半にヒンドゥー・ムスリム間の衝突を引き起こした。こうしてみると、植民地インドが分離独立へと向かう図式のなかには、たんに国民会議派とムスリム連盟の対抗関係だけではなく、それらに隣接する諸派が存在し、イギリス支配の影響力をめぐって、互いに他を牽制しあう関係にあったのである [長崎 1989: 105-11]。

しかし、こうした錯綜した利害関係のなかから、ヒンドゥー・ムスリムの対立の図式が、20 世紀にはいってイギリス分割統治のもとでいっそう鮮明に浮かび上がってゆく。イギリスは、1905 年のベンガル分割令、1909 年のモーリー＝ミント改革、1919 年のモンターギュー＝チェルムズフォード改革、そして 1935 年のインド統治法など、一連の政策によって分割統治を進めてきた [狭間・長崎 2009: 314-18; 328-29]。こうしたなかで、国民会議派とムスリム連盟は、1916 年にラクナウ協定を結び、1919 年に、言論や出版への厳しい統制を規定したローラット法案や、無辜の群集を弾圧したアムリツタル大虐殺にたいしてともに大衆ストライキを展開した。さらに、1920 年から 1924 年にかけてのヒラーファト運動は、ガンディーの強力な支援を受けて、コミューナル融和の雰囲気をもし出した [同前書: 348-51; 363-70]。

ガンディーは、南アフリカにいた時分から、実は「ヒンドゥーとムスリムのあいだに、純粹の友情がないことに気づいていた」というから [Gandhi 1997: 368]、みずからが 1919 年に議長を務めた全インド・ヒラーファト会

議をコミューナル統一の好機と考えていたものと思われる [石井 2014: 24-25]。このとき、ガンディーは、両宗派がみずからの利害を相手にたいする取引材料とすることをつぎのように否定的に捉えている。つまり、「ヒンドゥーの側がこの点〔ヒラーファト問題〕にからめて牝牛の問題を引き入れ」ること、また「ムスリムが、ヒラーファト問題でヒンドゥーから支持を受ける代償として、牝牛屠殺をやめること」は、双方にとって「ふさわしくない」。しかし、「ムスリムがヒンドゥーの宗教的感情に寄せる敬意から、……自由意志で牝牛の屠殺をやめるならば、それは、……非常に奥ゆかしく、また名誉あることである」 [Gandhi 1997: 399]。もっとも、1924 年 3 月にヒラーファト運動がその大義名分を失うと、ヒンドゥーとムスリムは、むしろ殺戮を伴う抗争に明け暮れるようになる。ガンディーは、そうした状況を目の前にして、出獄後の 1924 年 9 月に宗派間の融和のために 21 日におよぶ断食を行なった [Fischer 1995: 279]。

一方、ジンナーの方も同様に、連盟の 1916 年ラクナウ大会での総裁演説では、「インドの真の進歩は、二つの偉大な姉妹のコミュニティの間の真の理解と調和的關係によってのみ実現できるのです」と述べていた [Merriam 1980: 40]。ところが、1937 年の州立法議会選挙で国民会議派が圧勝すると、ネルーら会議派指導部は、ムスリム連盟を軽視するようになる。こうした姿勢は、会議派にたいする連盟の態度を硬化させることとなり、シリル・H フィリップスによれば「完全な誤算」 [Philips 1949: 132] であり、ペンデルレル・ムーンによれば「パキスタン成立の主要因」 [Moon 1961: 15] となるものであった。

1939 年 9 月にイギリスが第二次世界大戦に参戦すると、会議派は、すべての州政府の役職から撤退した。これにたいしてムスリム連盟は、イギリスの苦境に理解を示して戦争協力の姿勢を示したのである [Merriam 1980: 63]。1940 年 3 月、ムスリム連盟ラホール大会は、「独立国」(Independent States) を宣言 [Allana 1967: 172]、ジンナーは、総裁演説において、新生国家が「隣国と完全な調和のもとに存続する」と主張した [ibid.: 187]。

一方ガンディーは、むしろ「この主権国家は、自らが昨日まで一部をなしていた国とおそらく戦争状態に陥るであろう」と危惧した。

ガンディーは、まずイギリスから独立を勝ちとり「その後であらゆる相対立する要求を調整しよう」とジンナーに呼びかけたが、ジンナーは包括的独立よりもムスリムによる主権国家の樹立を優先したのである[CWMG, v.76: 315-16]。会議派は、一時解除していたガンディーの指導を1942年8月にふたたび仰いで、「クイット・インド」(インドを撤退せよ)決議を採択したが、このときジンナーが、同決議に協力しなかったことはいうまでもない[Tendulkar 1988-90, v.6: 148-68]。

ガンディーにとって、獄中にあった1942年8月から1944年5月までの社会状況は、「まったく救いようのない悲劇」であった。フィッシャーによれば、「ガンディーが刑務所の門をくぐり、その扉が閉じられた瞬間、暴力の水門は開かれた」という。警察署や政府建造物が放火され、電線が切断された。鉄道の枕木が引き抜かれ、イギリス人官僚が襲撃された[Fischer 1995: 495, 504]。この間、ジンナーはインドを自由に回り、しばしばガンディーを「イスラーム社会の福祉にたいする主要な脅威」として描き出した。メリアムによれば、「ムスリム連盟の単線思想的な宣伝活動は、1944年までにジンナーをインド政治の一大勢力に仕立て上げた」という[Merriam 1980: 90-91]。

1946年にムスリム連盟は、パキスタン独立のための「直接行動」の日を8月16日とすることを決議していた。この日から8月20日にかけてカルカッタで暴動が発生、ムスリムとヒンドゥーあわせて4000人が殺害され、1万5000人が負傷した[Jalal 1985: 215-16]。この年10月には、ムスリムが多数を占める東ベンガルのノーアカーリー地方でコミューナル暴動が発生すると、殺人、強姦、略奪、強制改宗などの残虐行為が、ビハール、連合州、ボンベイ、パンジャブなどへと連鎖していった[Merriam 1980: 122]。

ガンディーは、10月6日の『ハリジャン』誌上でムスリム連盟のパキスタン構想をつぎのように激しく批判する。

イスラームは、人類の統一と兄弟愛を意味するものであって、人間の家族としての一体性を乱すことを意味しない。したがって、インドをおそらくは敵対するであろうグループに分割しようとするものどもは、インドとイスラーム共通の敵である。[CWMG, v.85: 367]

ガンディーは、インドの分裂を食い止めるための究極の策として、1947年4月にマウントバッテン新総督にたいし、暫定内閣を解散してジンナーを首相に据えるように進言するが、この進言は実現しなかった[Merriam 1980: 125]。6月3日に総督は、ついにインド・パキスタン分離独立の最終案を発表した。それは、英領インドをムスリム多数州とヒンドゥー多数州に分割し、それぞれに権力移譲しようとするもので、会議派と連盟によって承認された[Jalal 1985: 286]。ジャラルは、マウントバッテンが、この計画を「歴史上もっとも偉大な行政上の手術」としたことをつぎのように批判する。「この『偉大な手術』なるものは、実は、イギリス人がインドのコミューナルな狂気を収めるといったやっかいな責任から逃れるための恥ずべき逃走劇ではなかったか」[ibid.: 293]。

パキスタンは1947年8月14日、インドは翌15日に、それぞれイギリスから独立した。しかし、ガンディーにとって、こうした分離独立は悲劇以外のなにものでもなかった。フィッシャーによれば、「独立は、独立の建設者に悲しみをもたらし、国父は自国に失望した」のであり、「インド人は、ガンディーにとってインドの独立以上に大切な非暴力を裏切った」のであった[Fischer 1995: 607]。

分離独立がけっして平和をもたらさないというガンディーの危惧は、現実のものとなった。それぞれの新生国家において少数派になることを恐れた難民たちは、人為的に確定された国境線を越える大移動を開始した。その数は、1947年の冬までに1500万にのぼり、このうち虐殺された数は、20万とも50万ともいわれている[中村 1977: 182]。

ガンディーの悲願であった統一国家は樹立されなかったが、コミューナル統一のテーマは、インド独立以後も建設的プログラムの不可欠の構成要素であった。「インドが幸福に生きるためには、建設的プログラム以外の道はない」[CWMG, v.90: 295]。彼は、1948年1月13日、ヒンドゥーとムスリムを含めた「すべての人々の良心」に訴えて、生涯最後の断食を実行する[ibid.: 413]。断食の3日目に、インド連邦政府にたいして、分離独立前のインド資産のうちパキスタンの分け前に相当する5億5000万ルピーを同国政府に支払うよう要請する声明をピアレールに口述筆記させている(これに応じてインド連邦政府はすぐさま送金した)[Fischer 1995:

637-38]。

ガンディーは、隣国どうしの友好関係を築くために、パキスタン政府の招聘を前提として同国へ赴くことを計画していた[CWMG, v.90: 465]。他方、国民会議派を国民奉仕協会（Lok Sevak Sangh）に再編成する構想を1月29日にしたためている。この協会は、手紡ぎ・手織り、不可触民制度廃止、そしてコミューナル統一を中心として「非暴力」の社会経済を樹立するための機関である。しかし、翌30日のガンディー暗殺によって、これらの計画はついに実施されることはなかった。

ガンディーにとって、国家としての「独立」以上に大切だったのは、その中身としての「非暴力」の社会である。そこでは、人々が、互いに異なる信仰を尊重し、互いを敬愛しながら生きてゆくことが求められる。こうしたガンディーの国家観は、民族を基本単位として成立するいわゆる近代の国民国家とは異なっている。また、トマス・ホブズが「万人の万人にたいする闘争」と表現した自然状態、ジョン・ロックが「生命・自由・財産」からなるとみなした自然権、はたまた、ジャン=ジャック・ルソーが、共同体の「一般意思」のもとに人々の権利が全面的に委譲されて結ばれる社会契約のあり方とも異なっている。

近代の国家は、一般に、対内的には個人の自由と権利を保障しつつ国内秩序を維持し、対外的には主権国家として自国の利益を追求しながら国際秩序の維持に参画する。いずれの場合も、基本的には個人や国家による利己心や秩序維持のための暴力を前提とする概念である場合が多い。ガンディーの国家観は、こうした近代的国家観とは異なり、同胞愛と「非暴力」を前提として人々や国家の間のコンヴィヴィアルな関係を構築しようとするものである。私たちが、利己心と暴力にもとづく現行の国際関係からのパラダイム転換を図ろうとするならば、こうしたガンディーの国家観に近代国家の矛盾を乗り越える契機を見いだすことができるものと考えられる。

#### 参考文献

- Allana, Gulam [1967] *Pakistan Movement: Historic Documents*, Karachi: Paradise Subscription Agency.  
Fischer, Louis [1995] (1951) *The Life of Mahatma Gandhi*, 6th edition, Bombay:

Bharatya Vidya Bhavan.

Gandhi, Mohandas Karamchand [1958-94] *The Collected Works of Mahatma Gandhi (CWMG)*, 100 vols., New Delhi: The Publication Division, Ministry of Information and Broadcasting, The Government of India.

Gandhi, Mohandas Karamchand [1963] *The Way to Communal Harmony*, U. R. Rao edited, Ahmedabad: Navajivan Publishing House.

Gandhi, Mohandas Karamchand [1997] *An Autobiography or The Story of My Experiments with Truth*, Ahmedabad: Navajivan Publishing House.

狭間直樹・長崎暢子[2009]『世界の歴史27 自立に向かうアジア』中央公論新社。

石井一也[2014]『身の丈の経済論 ガンディー思想とその系譜』法政大学出版局。

Jalal, Ayesha [1985] *The Sole Spokesman: Jinnah, the Muslim League and the Demand for Pakistan*, Cambridge: Cambridge University Press.

松本礼二・川出良枝[1997]『近代国家と近代革命の政治思想』放送大学教育振興会。

Merrium, Allen Haynes [1980] *Gandhi vs Jinnah: The Debate over the Partition of India*, Calcutta: Minerva Associates (Publications) Pvt. Ltd.

Moon, Penderel [1961] *Divide and Quit*, Berkeley: University of California Press.

長崎暢子[1989]「ヒンドゥー・ムスリム問題への視角」佐藤宏・内藤雅雄・柳澤悠編『もっと知りたいインド』弘文堂。

中村平治[1977]『南アジア現代史』山川出版社。

Philips, Cyril Henry [1949] *India*, London: Hutchinson's University Library.

Sarkar, Sumit [1983] *Modern India 1885-1947*, Madras: Macmillan.

Tendulkar, Dinanath G. [1988-90] *Mahatma: Life of Mohandas Karamchand Gandhi*, 8 vols., reprinted edition, New Delhi: The Publication Division, Ministry of Information and Broadcasting, The Government of India.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- (1) 石井一也「ガンディー思想の現代的意義：コンヴィヴィアリティを軸として」『社会科学ジャーナル』No.78, 2014, 国際基督教大学社会科学研究所, 9-22 ページ, 査読無.

〔学会発表〕(計 3 件)

- (1) 石井一也「ガンディー思想の現代的意義：コンヴィヴィアリティを軸として」国際基督教大学(東京都・三鷹市), 2014年5月1日.
- (2) Ishii, Kazuya, “Gandhism for Conviviality”, International Peace Research Association, at Hilton Istanbul Conference Center, Istanbul (Turkey), August 14, 2014.
- (3) Ishii, Kazuya, “Gandhism for Conviviality”, The 5<sup>th</sup> Chiang Mai University-Kagawa University Joint Symposium, at Chiang Mai University, Chiang Mai (Thailand), September 10, 2014.

〔図書〕(計 2 件)

- (1) (共著) 日本平和学会編『平和を考えるための100冊+』法律文化社, 2014年1月, うち石井一也「62 『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』」, 230-31 ページ.
- (2) (単著) 石井一也『身の丈の経済論 ガンディー思想とその系譜』法政大学出版局, 2014年3月, 342 ページ.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 一也 (Ishii, Kazuya)  
香川大学・法学部・教授  
研究者番号：70294741

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：